

(4) 調査研究

同范スタンプ文を有する瓦質土器の一事例

～上の寺遺跡・小田島城跡出土資料から～

はじめに

平成 19・20 年度に実施した寒河江市上の寺遺跡の発掘調査において、スタンプによる雷文が施された瓦質土器（第 2 図－1）が出土した。このスタンプ文は、東根市小田島城跡から出土した瓦質土器（山形埋文 2004）で確認された同范スタンプ文の一群（高桑 2007）と同じスタンプが使用されていた。

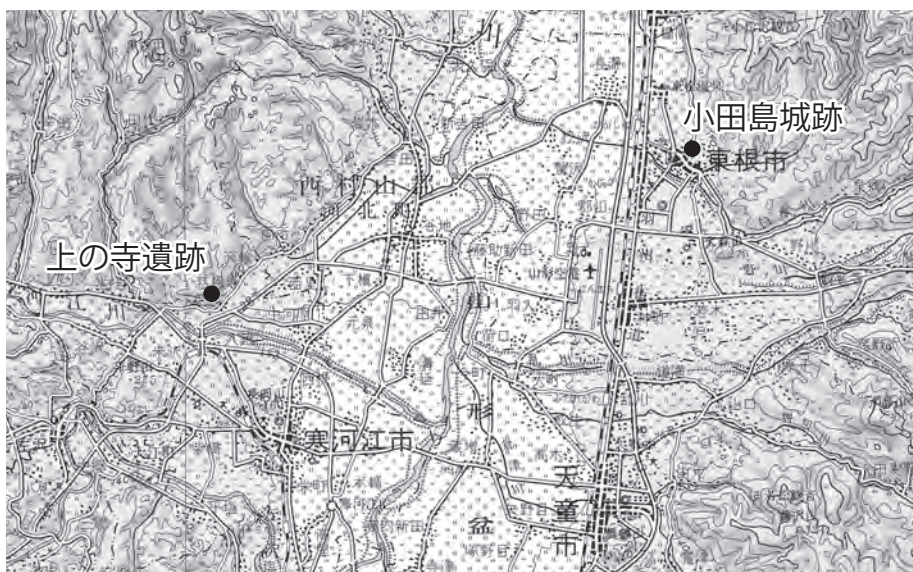
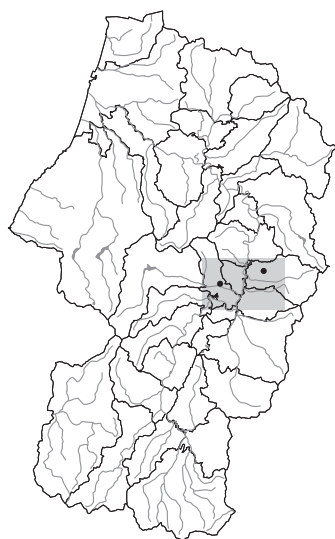
本稿では、これらの同范スタンプ文を有する瓦質土器について検証と事例紹介を行ない、その意義について若干の考察を試みる。

1 遺跡の概要

上の寺遺跡は寒河江市に所在し、国重要文化財の十二神将等で有名な慈恩寺に隣接する。現在の慈恩寺本堂が山地の南斜面に立地し、上の寺遺跡が東南斜面に立地する。一帯は斜面を造成した平場が連続して分布し、遺跡の中心には中世に十二神将や薬師三尊を納めていた薬師寺、聞持院という寺院があったとされ、土塁が現存する。

調査では 13 世紀から 17 世紀の遺構・遺物が出土している。仏具と考えられる金属製品や、板碑、五輪塔、宝篋印塔等の石塔が出土し、文献や伝承のとおり寺院が存在していた可能性が高い。

◇



第 1 図 遺跡位置図（「地球地図日本（簡易版）」Ver.1.1、国土地理院発行 20 万分の 1 地勢図「仙台」を使用して作成）

小田島城跡は東根城とも呼ばれ、正平 2 年（1347）の築城と伝えられる。寛文元年（1661）に廃城となっている。現在本丸には東根小学校が建ち、敷地内に国特別天然記念物の大ケヤキがある。二の丸、三の丸は宅地や果樹園となっているが、水路や沼、道路等は廃城当時の形状を良く残している。平成 9～13 年度に城内を南北に縦断する県道建設に伴って発掘調査が行われた。14 世紀後半から 15 世紀初頭を中心として、12 世紀から 18 世紀の遺構と遺物が検出された。

両遺跡は山形盆地の東西端に位置し、直線距離で約 13km 離れる（第 1 図）。いずれも盆地に張り出した山地、台地上に立地し、それぞれ山地、台地の南面には最上川支流である寒河江川、白水川が流れる。

2 遺物の特徴

表 1 に遺物の特徴を示した。第 2 図の 1、2 は口縁部が内側に張り出す浅鉢である。1 は張り出し部の内側までミガキ調整が施されるが、2 は上部の平坦面までミガキ調整で、口縁部内側は内面と同じナデ調整となる。1 は体部と張り出し部がほぼ同じ厚さでシャープに作り出されるの対し、2 の張り出し部は肥厚し、内面の角は面取り状に丸みを帯びる。

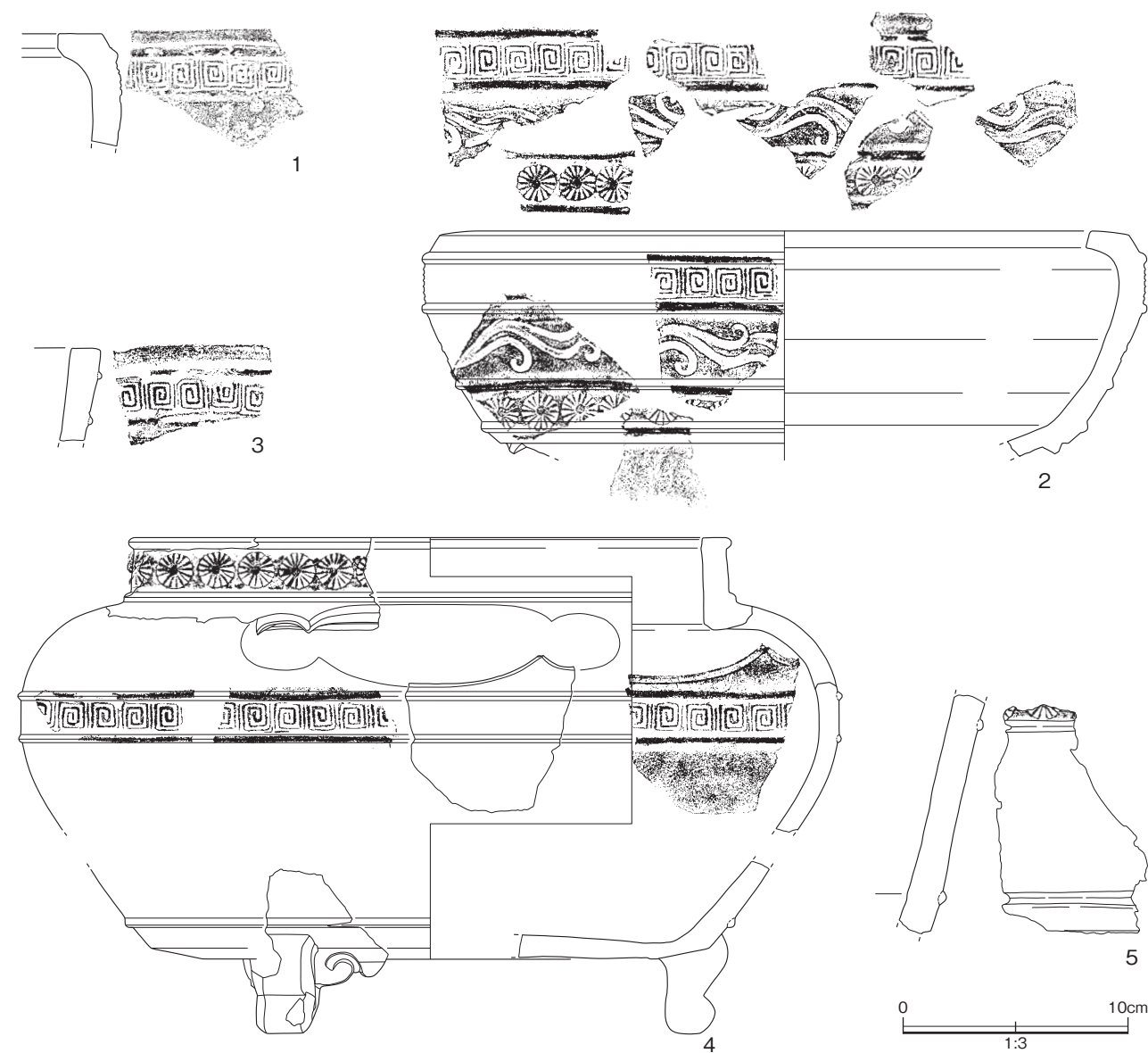
これらの特徴からは 1 が後出の印象を受けるが、2 の

体部に施される唐草文が1には認められないことから、製品の質による差異の可能性もある。

3、5は直線的な体部を持つ直口の浅鉢である。二重の突帯間に3は雷文、5は菊花文のスタンプ文が施される。3は口縁部上面までミガキ調整される。

4は垂直に立ちあがる頸部に肩の張った体部、獣脚を持つ風炉で、肩部に雲形の窓が開けられる。窓の断面は内外面ともに面取りされる（註1）。

色調はいずれも黒色を基本としているが、明らかに同一個体の破片であるにもかかわらず、燻しが十分でなく



第2図 上の寺遺跡（1）・小田島城跡（2～5）出土瓦質土器（1: 初出 2～5: 山形埋文 2004 を一部改変）

表1 遺物観察表

No.	出土位置	共伴遺物	分類*	装飾	調整・成型	胎土	備考
1	上の寺遺跡 SK0047 覆土	—	浅鉢形土器 V 類 円形浅鉢 III 類	突帯 + 雷文	外面ミガキ 内面指頭痕 + ナデ	2.5Y8/1 灰白色（砂粒含・外面磨減 一部サンドイッチ状焼成）	
2	小田島城跡 SX720 石敷遺構覆土	瓷器系陶器甕 青磁蓮弁文碗・盤	浅鉢形土器 V 類 円形浅鉢 III 類	突帯 + 雷文 + 唐 草文 + 菊花文	外面ミガキ 内面ナデ 底部砂付着	2.5Y6/1 黄灰色（砂粒含）	燻しのない褐色の 破片あり
3	小田島城跡 SD2 堀覆土	中近世陶磁器多数	深鉢形土器 IA 類 円形浅鉢 IV 類	突帯 + 雷文	外面ミガキ 内面ナデ	5Y8/1 灰白色（雲母少量 含）	漆接ぎ
4	小田島城跡 3SX454 石敷遺構	瓷器系陶器甕 古瀬戸中 I～後 II 青磁蓮弁文碗等	風炉形土器 風炉 II 類	突帯 + 雷文 + 菊 花文 窓・獣脚	外面ミガキ 内面指頭痕 + ナデ 底部付着	5Y8/1 灰白色（砂粒少量・ 雲母少量含）	
5	小田島城跡 SD2 堀下層	中近世陶磁器多数	深鉢形土器 IA 類 円形浅鉢 IV 類	突帯 + 菊花文	外面ミガキ 内面ナデ	N7/0 灰白色（砂粒含）	内外面部分的な燻 し

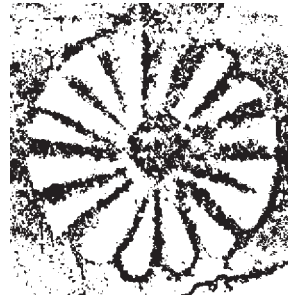
※上段佐藤分類（佐藤 1996）・下段水澤分類（水澤 1999）



1 雷文（上下反転）



2 雷文



2 菊花文



3 雷文（上下反転）

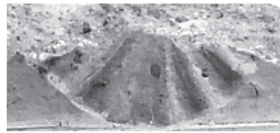
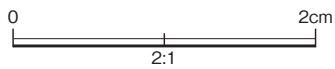


4 雷文



5 菊花文

4 菊花文

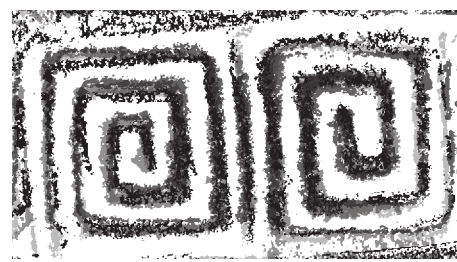


5 菊花文

第4図 スタンプ写真・拓影図



1 突帯貼り付け部

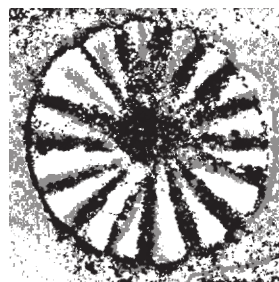


1 ~ 4

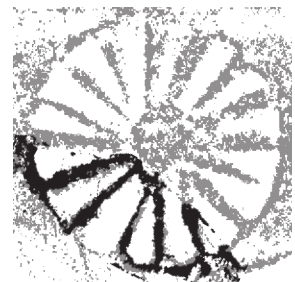


3 突帯貼り付け部

第3図 製作技法の痕跡



2・4



2・5

第5図 スタンプ拓影図合成

褐色を呈する破片があるもの（2）や、燻しによって黒色化した部分が斑状になるもの（5）等がある。

装飾は全て突帯とスタンプによって施される。棒状の工具で浅い沈線を引いた後に突帯を張り付けている。突帯の上下には棒状工具でなでつけた痕跡が認められるものが多い（第3図）。底部が遺存している2・4は、底部全面に砂が付着している。胎土は灰白色から灰色で砂粒を少量含んでいる。器面に光沢のある雲母片が確認できる。焼成は堅緻で叩くと金属音がする。

胎土や成型・装飾技法に共通点が多く、これらの遺物は同一の生産地で生産されたと考えられる。突帯の貼り付け方法や離れ砂などは大和産の瓦質土器と共通しているが、2のように複数種類のスタンプを全面に施すことや胎土の特徴など、大和産とは異なる点（註2）も多く、大和以外で生産された可能性が高い。

良好な一括資料がないため、共伴遺物から年代を推定することは難しいが、他地域の様相との比較から生産年代は、15世紀前半頃と考えられる。

3 スタンプの比較

第4図にスタンプの写真と拓影図を示した（註3）。雷文は1・2・3・4に使用されている。中心から左回りの渦2ヶ1単位で構成され、中心のコの字型の部分がそれぞれ上下に開く。二つの渦の間に区画する縦線が入る。それぞれのスタンプを比較すると、左右の渦中心部の形状、区画縦線の湾曲など、類似する部分が多い。

第5図にそれぞれの拓影図の濃度を変えて重ねた図を示した。スタンプ押印後の乾燥・焼成による収縮や、拓影図の紙の歪み等による誤差はあるが、大きさ、形状がほとんど一致することがわかる。

以上の点から、1から4の製品に施されたスタンプ文は、同じスタンプが用いられていると判断できる。1・3と2・4は上下が反転しており、スタンプの上下についてはあまり意識されていない。

菊花文は2・4・5に使用されている。2・4は花卉が16弁で共通する。しかし、4の左下に見られるよう

な幅の広い花卉が2では見られない。第5図の合成図を見ても、部分的には一致するものの相違点が多い。2と4は異なるスタンプが用いられていることがわかる。

5は6弁分のみ遺存しているが、2と重ねると、ほぼ一致することがわかる。部分的な比較であるため確定はできないが、2と5は同じスタンプの可能性が高い。

これらの5点の遺物について、雷文は1種類、菊花文は少なくとも2種類のスタンプが使用されていることがわかった。2と4については、雷文は同じだが、菊花文は異なるスタンプが使用されている。

4 まとめ

上の寺遺跡、小田島城跡から出土した瓦質土器について、胎土、製作・装飾技法等を比較し、使用されているスタンプの同范関係の検証を行なった。

その結果、同じ盆地内ではあるが10数km離れた2つの遺跡から、同じスタンプを用いた瓦質土器が出土していることが明らかとなった。スタンプ自体が産地間を移動した可能性もあるが、胎土等の特徴からこれらの瓦質土器は同じ産地で生産された可能性が高い。

今回の事例によって、比較的判別が容易なスタンプが、産地の同一性を判断する基準の一つとして使えることを示すことができた。

在地の瓦質土器生産の実態は不明確な点が多いが、本資料から、少なくとも山形盆地中央部を流通圏とする瓦質土器の生産体制があったことが明らかとなった。これがどの程度の範囲の流通範囲を持つものか、今後、資料の増加によって明らかになってくると思われる。また、今回は肉眼観察にとどまった胎土についても、今後、理化学的な分析によって、より詳細な産地の同定が進むことが望まれる。（高桑登）

註1) 拓本の上下を一部誤って掲載していた報告書図版を修正して掲載している。

註2) 遺物の観察については、上の寺遺跡第2次発掘調査資料比較検討のために参加した第27回中世土器研究会において、参加者の方から遺物を実見していただき、多くのご教示をいただいた。

註3) 拓影図は比較しやすくするために凸部以外の汚れを除去し現寸の2倍で掲載している。

引用参考文献

財団法人山形県埋蔵文化財センター 2004『小田島城跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター第131集

佐藤亜聖 1996「大和における瓦質土器の展開と画期」『中近世土器の基礎研究』XI

高桑登 2007「東北の瓦質土器」『第26回中世土器研究会 瓦質土器の出現と定着－瓦質土器を考える（前編）－』日本中世土器研究会

日本中世土器研究会 2008『第27回中世土器研究会 瓦質土器の出現と定着－瓦質土器を考える（後編）－』

水澤幸一 1999「瓦器、その城館的なもの ―北東日本の事例から―」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第9集